



セルバンテス ★★

ドン・キホーテ 後篇
離婚係の判事さん グガ
ンソの村長選挙 忠実な
る見張り番 贋もののピ
スカヤ人 不思議な見世
物 サラマンカの洞穴
焼餅やきの爺さん

会 田 由 訳

世界文学大系

11

筑 摩 書 房 版

世界文学大系 11

セルバンテス ★★

昭和37年12月15日発行

定価 500 円



訳者	会	田	由
発行者	古	田	晁
印刷者	山	元	正 宜
発行所	株式	筑	摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話 (291)局 7651

目次

才智あふるる郷士ドン・

キホーテ・デ・ラ・マン

チャ 後篇

戯曲 (『幕間劇集』より)

離婚係の判事さん

ダガンソの村長選挙

忠実なる見張り番

賈もののビスカヤ人

不思議な見世物

サラマンカの洞穴

焼餅やきの爺さん

解説

年譜

会田 由訳 5

会田 由訳

会田 由

372 380 388 398 410 419 429 440 447

装
幀
庫
田
發

セル
バン
テス
★
★

才智あふるる郷士ドン・キホー
テ・デ・ラ・マンチャ 後篇

レーモス伯爵*への献呈の辞

さきごろ閣下へ、上演されるに先だつて印刷されました私の戯曲集をお贈りしましたとき、私の記憶がいでなければ、ドン・キホーテは閣下の御手に口づけをいたしにまいろうと、すでに靴に拍車をつけておりますと申しあげました。しかし、ただいまは、彼は拍車をつけおえて、すでに発足いたしましたと申しあげます。そして、もし彼がそちらへ到着いたしましたら、私も閣下へいくらかのご奉仕をいたしたことになるうかと存ぜられます。それと申すのも、後篇の名にかくれて変装し、この世をうろつきまわりました、もう一つの『ドン・キホーテ*』がひき起こした、不快感や胸くその悪さをきれいさっぱりなくすために、本物をよこしてくれとあちらからもこちらからも矢の催促をいただいているからでございます。

なかでも、もっともそのことに熱意を示して

まいったのが、シナの大帝でございました。というのが、一月ほど前になりましたか、私あてにシナ語で書いた手紙を使者に託して、『ドン・キホーテ』を送るようにと要求して、と申すより、懇望してまいったのでございます。それと申すのが、皇帝はカステイリヤ語を教える学院を創りたい、しかも、そこで講義する書物はドン・キホーテの物語のそれにしたいと望まれていたからでございます。それにつけ加えて、私にその学院の院長をつとめに出向くようにと書いてございました。そこで私はその手紙の持参者に、陛下は私のためにと、何がしかの旅費をお託しにでもなつたらうかと説ねました。すると、相手はそんなことは思いつきもしなかったと答えました。

「それなら、お前さん」と、私は申しました。「あんたは、あんたのお国のシナへ、一日に十レグワなり二十レグワなり、派遣されてこへ来なすつたときの行程で、お帰りなさるがよい。というのが、私はそんな長い旅路にのぼるほど元気なからだではないからです。それに、健康がすぐれないばかりか、私はひどくお金に窮しているのです。そのうえ、私には皇帝の中の皇帝、君主の中の君主として、ナポリご在勤のすばらしいレーモス伯爵がおわして、しかもこの方は、学院だの院長だのという大げさな肩書なしに、私を扶養し、庇護し、私がこうしていただきたいと願うよりもはるかに恩恵を与えてくださるからだよ」

これで、私はその男を追ひ帰しましたが、Deo volente（神がおゆるしくだされば）、あと四カ月で書き終えるつもりで書物『ペルシーレスとシヒスムンダの苦勞*』を閣下に差し上げることとして、これで私もおいとまいたします。この書物は、もちろん気晴しの読みものとしての話ですが、わが国の言葉で書かれたものとも悪い本になるか、それとももっともすぐれた本になるはずでございます。いや、《もっとも悪い本》と申したことを、実は後悔いたしている和白状いたしました。それと申すのが、私の友達らの意見では、かならずや、達しうる極限までのすぐれたものになると申すのですから。では、閣下よ、望ましい健康にめぐまれ給えかし。と申すのも、間もなく『ペルシーレス』も御手に口づけいたしましたようにし、私も閣下のしもべとして、おみ足に口づけいたす次第でございます。

一六一五年十月末日、マドリードにて。

閣下のしもべなる

ミゲル・デ・セルバンテス・サベードラ

読者への序言

いやはや！ やんごとない、もしくは下々の読者よ、そなたはこの序文の中に、第二の『ドン・キホーテ』、つまり、トルデシーリヤスで孕まれて、タルラゴーナで生まれたと伝えられるあの物語の作者に対する、報復、罵詈、攻撃が見られるものと思つて、さぞかし今ごろは、じりじりして待つておいでのことであらう。ところが、私は、まったくのところ、その満足をそなたに与えるわけにはゆかないことになっている。辱しめを受ければ、いかに謙虚な人々の心にも、怒りが眼をさますものとはいひながら、私の心には、この法則の例外が起こることになつてゐるからである。読者は、私にあの作者を、驢馬ろばとも、馬鹿とも、身のほど知らずものものしつてもらいたいにちがいない。しかし、私にはそんなことはついぞ心に浮かんだことすらない。おのれの罪に責められよ、おのれのパンは自ら食え、どうとも勝手にさせておけ、である。ただ私が気にしないわけにゆかなかつたことは、私のうえに時が過ぎてゆかないかのように、時の流れをせきとめることが、私の力に及ぶことだつたともいうように、もしくは、私の片腕の不具が、過去と現在の諸世紀が目撃した、かつは未来の諸世紀もしょせん目撃する望みも

ないといういとも崇高な機会に生じたものなのに、どこかの居酒屋でも起こつたともいうように、私をやれ年寄だ、やれ片腕だと指摘していることだ。なるほど私の負傷は見る者の眼には光かがやくものではないかもしれぬが、少なくともどこで受けたものかを知っている人々の評価では、尊敬されるものである。兵士は逃亡して無事であるより、戦場で死んだほうがはるかに立派に見える。しかも、私はこのことに關しては確信があるので、もしも今、人がある不可能事を提案し、実現してやろうと言つてくても、あの驚異的な戦闘に参加せずに無傷ですこやかでゐるよりも、むしろあの戦闘に加わつていたかつたと思う。兵士が顔や胸にさらしている傷痕は他の人々を名譽の天国へ、当然受くるに価する稱賛を願う天国へ導く星である。そして、ここで心にとめてもらいたいことは、白髪によつてものを書くわけではない、悟性によつて書くものであつて、これは年を経るにつれて鋭くなるということだ。

これまた私が腹にすえかねたことは、あの作者が私を羨ましがりやだと呼び、まるで私が無知な男のように、羨望とはいかなるものかを私のために述べたてゐることである。まったくのところ、二種類ある羨望のうちで、私の知つてゐるのは、ただ聖らかな、高貴で、しかも善意の羨望にすぎない。これがそうだとしたら、いやそうなのだから、私はいかなる聖職者も追求する必要はない、ましてその人が宗教裁判所

の客員を兼ねてゐるとしたらなおさらのことだ。もしも、あの作者が知つてゐるらしい人物人物について、知つたのだとしたら、彼は何か何まで間違つてゐる。それというのも、私はその人の才を実にたつとんでゐるし、その人の作品にも、その不斷の、立派な精進にも敬服してゐるのだから。しかしながら、この作者先生が私の小説は模範的だというよりも諷刺的であるが、よい出来栄えだと評してゐる点には、實際、私は感謝してゐる。しかし、その両面をいづれも具えていないとしたら、よい出来栄えにはなり得なかつたろう。

読者は私のやり方がひどく因循いんじゆんで、控え目なわくの中にじつと我慢してゐるとおしやるのではないかと思うが、それというの、私は悩める者のうえにさらに悲しみを加えるべきではないということを知つてゐるばかりか、この作者が心にいだいてゐるにちがいない苦しみはきつと大きいだろうと知つてゐるからである。なぜならあの男は、あたかも何か不敬罪でも犯したかのように、本名をかくし、生國をいつわつて、うち開けた場所や明るい大空のもとへ、平然と現われる勇氣がないからである。もしも何かのひょうしで、あなたがあの男にお会いになつたら、どうか私にかわつて、私はきずつけられたとは思つてゐないと伝えていただきたい。それというの、私は悪魔の誘惑誘惑というものがどういふものかも、また最大の誘惑の一つは、自分も本を書いて印刷させることができる、そ

れでもって金銭にひとしい名声を得、名声にひとしい金銭をかせぐことができるということを、人間の頭にのみこませることだと、よく承知しているからで、このことを証拠だてるために、あなたのあざやかな、巧みな話し方で、つぎの小話を話してきかせていただきたい。

セビーリヤにひとりの狂人がいたが、これがこの世の狂人がおこなった中でももっともおかしなでたらめと、とんだ妄執をいだいた。それは、さきの尖った蔑で管をつくって、そうやって、街路や、その他の場所、どっかの犬を見つけると、そいつの片方の後脚をおのれの足でおさえつけ、犬のもう一方の後脚を手で持ちあげて、そいつに息を吹きこんだら、犬がまりのように丸くふくれる場所へ、例の管をできるだけ上手にはめこんだものだ。そこで犬をそんな工合にすると、ふくれた犬の腹を軽く二つばかりたたいて、犬を放してやっては、いつもきまって大勢たかっている周囲の人々に向かって、「さあ、どうだね、あんた方は犬をふくらますくらい造作ないことだと思いませんか？」と言ったものだ。ところで、あんたも、本をつくるくらい造作もないことと思いませんか？とね。

で、もしこの小話があつた男のお気に召さなかったら、親しい読者よ、次の、これまた狂人と犬の出でくる話をきかせていただきたい。

コルドバに別の狂人がいたが、これは平たい大理石のかげらや、あまり軽いとは言えない石

のかげらを頭の上にのっけて歩くのが癖で、そうやって、うっかりしている犬に出会ふと、そのそばへ寄つていって、犬の上へまっすぐに重たいやつを落したものだ。すると犬は怒って、吠えて、きんきん鳴きながら、二、三町さきまで止まりもせずに逃げていった。ところで、あるとき、狂人が石を投げおろした犬の中に、たまたま帽子屋の飼犬があつたが、それが主人のとても可愛がつていた犬であつた。石が落ちてきて、犬の頭にあたる。なぐられた犬が悲鳴をあげる。これを見ると、主人はかつとなつて、物差をつかむと狂人へおどろかかつて、からだじゅう満足な骨は一本もないほどなぐりつけた。そして一つなぐるたんびに、「この泥坊犬め、おいらの犬をボデンコだと気情け知らずめ、おいらの犬をボデンコだと気づかなかつたのか？」とどなった。そうやって、

「ボデンコ」という言葉を何べんもくり返して、狂人をさんざんにたたきのめして追いかへした。狂人はこれにこりごりして、家にひきこもつて、それから一月あまりも、人なかへは顔を出さなかつた。しかしそれだけの日数がすぎると、またぞろ、例のたくらみをいだいて、さらに重たいやつを頭に乗せてあらわれた。犬のいるところへ近づいていって、それをつくづくと眺めているが、石を投げおとそうという気も、また決心もつかずに、「こいつはボデンコだぞ。桑原桑原！」とつぶやいた。じじつ、番犬であろうと、狎グレイであろうと、行きあう犬という犬を、彼

は狎グレイ犬だと言つたものである。そういうわけで、以来彼は石を落さなかつた。おそらく、これに似たことが、あの物語作者にもおきるに相違ない。それというのも、二度とふたたび、彼の頭脳にたまつたものを本の中にぶちまける気になれないだろう、なにしろ本がひどい悪書であつてみれば、岩よりもかたいのだから。

それに、あの男が自分の著作で、私の利潤をかならずとりあげてみせると言っているおどし文句については、私は平氣の平左だと伝えていただきたい。つまり、私はあの名高い幕間狂言『ラ・ペレンデンガ』のせりふに合わせて、「わが殿、二十四衆の万歳を祈り、キリストの平安われらと共にあれ」と答えるとしよう。偉大なるレーモス伯爵万歳、閣下の人も知るキリスト教徒らしい広大無辺のお心こそ、わたしのつたない宿命からこうむるあらゆる打撃に抗して私を立たしめ給うものである。さらにトレードの獵グレイ下ドン・ベルナルド・デ・サンドバル・イ・ローハスのいや高き慈愛の長久を祈るものである。そして、たとえこの世に印刷所がなからうと、よしんば『ミンゴ・レブルゴ』の歌の文字の数よりたくさん書籍が、私を目の敵にして印刷されようとかまうものではない。この二人の貴人は私の追従や、そのほかの讃辞を用いてお願いしたわけでもなく、ひたすらご自身のやさしい思いやりから、私に慈悲をたれ、庇護を与え、ことを引き受けてくださったのである。よしんば運命が、ありきたりの筋道を私を絶頂

まで引きあげてくれたよりも、そのことで、現在の自分をはるかに幸福で、はるかに裕福だと思つてゐる。人としての誇りは貧しい者も持つことができる。しかし不徳な人間には持つことはできぬ。貧しさが気高さを曇らせることはあつても、まったく暗闇にしてしまうことはない。しかしながら、徳というものは、たとえどんな障害があつたにしろ、どんな窮乏のすきまからにしろ、いくらかの光を自分の中から放つものだから、高く貴い精神の人々になつとばれ、ひいては、庇護を受けることにもなる。ところで、読者はこのうえあ男に言うことはないし、私もこのうえあ男に申しあげるつもりはない。ただ、注意までに申しそえたいことは、ただいまお手もとに差しあげるこの『ドン・キホーテ』の後篇は、前篇とおんなじ職人が、おんなじ切地を裁断してつくつたもので、私はこの中で、後日のドン・キホーテを、ついで、しまひには、死んで埋葬されるドン・キホーテを述べることが、これは何人にも彼のために事新しく別の証言をしようなどという氣を起こさせたくないからである。というのも、すでにある証言で十分なんだし、のみならず一人の心たらしい人間が、この味のある狂気沙汰を、すっかり報告してしまつて、もういちどその狂気沙汰にかかわりたくないというのだから、それでいいわけだ。たとえいいものでも、ものがあまりに豊富だと、大事にされないようになるものだし、たとえくだらないものでも、不足だと、いくらか大事に

されるものだからである。あなたに申しあげるのを忘れていたが、『ペルシーレス』はもう書き終えようとしているので、ご期待ください、それに、『ガラテア』の後篇も。

第一章

住職と床屋がドン・キホーテとその病について語り合ったこと。

シード・ハメーテ・ベネンヘーリは、この物語の後篇、つまり三回目のドン・キホーテの出来について次のように述べてゐる。住職と床屋は、過ぎざつたことを事新しく思い出させてはいけないというので、ものの一月ばかりはドン・キホーテに会わないでいた。もつとも、そのために相手の姫と家政婦を訪ねることは欠かさなひで、よくく主の看病に氣をつけて、ことにあやまりのない判断によれば、彼の不運はことごとく心臓と脳から発してゐたのだから、精氣のつく、心臓と脳のためによいものを食べさせるようにと注意した。二人の女は、そのとおりしてはゐるのですが、このところ主人もときどきすっかり正氣になつた様子を見せはじめたように思われますから、せいぜいいつそう氣をつけて、そうやってみましょうと言つた。それを聞いて、二人の男は大いに満足を覺えたが、それはこの壮大で、しかも正確な物語の前篇の最後の章で述べてあるように、彼を魔法にかけて牛車で連れかへつたことが、うまく図にあつたと思われたからである。そこで、彼らはドン・キホーテの見舞いにいつて、相手がすっかり病氣回復することなど、ほとんど不可能だと

は思っていたが、その回復ぶりをじかに確かめようと思ひ立った。そこで、遍歴の騎士道については何れもふれまいとおたがい申しあわせたが、それはまだ固まらない傷口にふれて、ふたたび口を開かせる危険をおかさないためであつた。

ついに、二人はドン・キホーテを見舞ひにいった。すると、相手は緑の粗織りラシヤの半袖ハコ胸着をつけ、トレードの赤い帽子をかぶつて、寝台に腰をおろしているところだつた。それが、すっかりひからびて、まるで鱈の乾物カタクダみたいな顔をしているものだから、どう見てもミイラそのままだつた。彼らは大変なよろこびようで迎へられた。相手の容態をたずねると、きわめて平静な態度で、しかもなかなか上品な言葉づかいで、自分のからだ工合や健康状態について答えてくれた。そして、おたがいに話をやりとりしているうちに、国家のためとか、政府のやり口と称するやつを論ずる仕儀にたちいたつたが、この弊害をなおすかと思ふと、あれを非難し、ある風習を改革するかと思ふと、別の風習を追放するという工合で、三人が三人、てんでに新たな立法者、現代のリニクルゴス、出来たてのソロモンになつたつもりで、国家をつくり直したものだから、どうしてもそれは国家を鍛冶屋の炉の中へ投げこんで、全然別のものにして取り出したときと思われなかつた。ところでドン・キホーテが、みんなで論じたすべての問題について、きわめて筋道の通つたことを話した

ので、さすがに二人の審査員も、これはもうすっかりよくなつて、元どおりの正氣に返つたものと、心から信じてしまつた。

姪も家政婦もその場に居合せて、この会話を聞いていたので、自分たちの主人がこんなにしつかりした理性を示したのを眼のあたりに見て、神さまにいくら感謝をささげても足りないくらい喜びをいだいた。しかし住職は最初の騎士道に関してはふれないことにしようという意思を変更して、ドン・キホーテの回復ぶりが、まやかしかものか本物か、とことんまで試してみようと思ひついた。そこで、相手に気どられないように話題を変えて、やがて首都からとどいなくつかの情報を話しはじめたが、その情報の中でも、トルコが強大な艦隊を編成して下降して来たことは確実視されている、そのくせ彼らの思惑も、このものすごい低気圧をどこでぶちまけるつもりかも、てんでわかつていないのだと語つた。さらに、このほとんど毎年の来襲の警報でおどろかされる不安で、全キリスト教国は武装を整えているが、われらの国王陛下もナポリとシチリアとマルタ島の沿岸に、すでに防衛措置をこ下命になつたといふけ加えた。それを聞くとドン・キホーテが答えた。

「陛下が敵に味方の虚をつかれないようにといふところから、時期を失せず防衛の措置を講ぜられたのは、まさに深謀遠慮の武將としてのなされ方じゃ。しかし、もしわしの進言をお取り上げ給うていたら、わしは陛下に、今ごろはま

だお心に浮かべさせられたこともない底の、一つの対策をおすすめて申していたことだらう」

これを聞いたかと思ふと、住職は心のうちでつぶやいた。「ああ、かわいそうに、ドン・キホーテよ！ 神の御手に抱きとめていたたくがよい。おぬしは、乱心の絶頂から痴愚の奈落へとびこむとき思えないぞ！」

しかし床屋は、これまた住職とおなじ考えに動かされていたので、採用されたらよかつたのにとおしやつた、防衛措置というのは、そもそもの進言だったのかとドン・キホーテにたずねた。ひよつとすると、上つ方へよく人々がささげる、おびただしい、とんでもない献策目録にのせられるようなしろものかもしれない。ませんなといふけ加えた。

「わしのは、ひげ剃りどん」と、ドン・キホーテが言つた。「とんでもないどころか、とんでもある献策じゃよ」

「いや、そんなつもりで申したわけじゃありませんやね」と、床屋はむきになつた。「ただね、これまでの例によると、陛下にささげられた献策のすべてとまではゆかないが、まるでできっこないことか、とんだでたらめか、さもなくば国王なり、国家に禍いするようなのが大部分だもんだから、つい口をすべらしたんでさあ」「ところがわしの献策は、不可能でもなければ、でたらめでもない」と、ドン・キホーテが答えた。「きわめて容易で、至極正しい、しかも実に手軽で、簡単な、どこの献策家にも思いつ

「けようというものじゃ」

「だいぶおつしやるのにおひまがかりますな、ドン・キホーテ殿」と、住職が言った。

「いやいや」と、ドン・キホーテが答える。

「わしが今、ここで言つてしまふと、明日の明け方には、ちゃんとそれが顧問官方の耳にはいつている、そうやって、せっかくのわしの苦心に對する恩賞もほかのやつがさらつていつてしまふというのが、わしはいやですわい」

「てまえのことなら」と、床屋が言った。「ここであり、神さまのまえでなり、お前のおつしやることは、国王だろうと、ローケだろうと、この世の人間には誰一人にもらしやしないと、誓いませう。こいつは、なんでも百ドラの金貨と脚の丈夫な驟馬とを盗んでいつた盗人をミサの序唱にかこつけて、国王さまにお知らせしたという坊さんのことをうたつたロマンセで覺えた誓言ですがね」

「その物語の歌は知らんが」と、ドン・キホーテが応じた。「しかし、その誓言のよさはわしにもわかる。というのも床屋どんが正直な男だということをよく知っているからじゃ」

「いや、たとえ正直者でもうても、拙僧がこの男のことは引き受けて保証しますわ。つまり、この件では、床屋どんは嘘のようにいっさいしやべらん、それをたがえたら、お上の判決どおり罰金を払うと申すことをな」

「すると、和尚さん、あなたのことは誰が保証しますかな？」と、ドン・キホーテがたずねた。

「それはわしの聖職じゃ」と、住職が答えた。

「秘密を守るのがつとめですから」

「ああ、是非もない！」と、このときドン・キホーテが口を開いた。「国王陛下が天下におふれを出されて、スペインを遊行している遍歴の騎士は残らず、定められた期日に都に集合せよと命ぜられる以外に何があると申すのじゃ？」

よしんば集まる者が五、六人にすぎぬとしても、その中にはただ一騎で、トルコの全軍を破るに十分な者がまいらぬとかぎらないではござらぬか？ ご両者とも、拙者の申すことをよく聞かれて、意のあるところをくんでいただきたい。二十万の軍隊が、あたかもただ一個の首級を持ち、あるいは敵兵がすべて有平糖で出来てでもおるように、ただ一騎の遍歴の騎士が、これを皆殺しにいたすということが、とりたてて珍奇なこととは申されまいな？ そうでないと思さるるなら、おたずね申そう。いかに多くの物語がそういう驚くべき事蹟に充ちあふれているではござらぬか？ 拙者にとって口惜しいことは、と申すのも他の者のためには申したくないからだが、あの名高いドン・ベリアニスか、せめてアマディース・デ・ガウラのおびただしい末裔の幾人かに、今日生きてもらいたかつたものだ。もし、これらの人々の中で、誰か一人生きながらえていて、トルコ軍にまみえたとしたら、さしもの敵軍もあやうい羽目に落ちていたことは必定じゃ！ しかし、神もご自分の民のことをみそなわし給うて、よしんば、その

昔の遊行の騎士のような勇壮な強者ではないにせよ、せめて意氣においてはおさおさひけを取らぬ誰か一人をおあてになるに相違あるまい。して、神のみが拙者の意のあるところをご存じだから、このうえ何も申すまいて」

「まあ、どうしよう！」と、このとき姪が口走った。「叔父さまはまたぞろ、遍歴の騎士をなさるつもりよ、間違いないわ！」

それに対して、ドン・キホーテが答えた。

「わしはどうあつても、遍歴の騎士として死ぬべき男じゃ。トルコ軍は、いつなりと好きなきに、いかなる強大を誇ろうと、下降するなり、攻めのぼるなりいたすがよいわ。だが、拙者は重ねて申すが、神のみがわしのご存じじゃ」

そのとき、床屋が口を出した。

「てまえにひとつ、皆さん方、セビーリヤで起こつたという、短い話をいたすことをお許しなすつてくださいよ。ちょうどこの場合にぴつたりと合つた話だもんで、おきかせ申したいんですよ」

ドン・キホーテがよからうと言つたので、住職はじめみんな耳をすました。すると、床屋はこういふふうには話しはじめた。

「セビーリヤの癡癲病院に一人の男がいたのですが、これは親族のものから常軌を逸したからというんで、そこへ入れられていたわけです。オスーナ大学で教会法の学位をとっていました、しかし世間の取沙汰では、たとえサラマン

カ大学を出ていたところで、氣違ひだったことには変りなかつたろうというんです。ところでこの大学出の男は、幾年かの監禁生活を送ったあげく、自分はおつて、正氣をとりもどしたんだと、みずから思ひこんだのです。こういう妄想にうながされて、大司教に嘆願書を書いて現在自分のおちいっているこのみじめな境遇から救い出せというご命令をお願いしますと、いかにも条理をつくした文章で切々と訴えていました。それというのが、神さまのお慈悲で、いったん失つた理性も、もう取りかえしているのに、親類の者どもが自分の財産をわがものによようと、ここへ自分を閉じこめているばかりか、全快したという真実を無視して、死ぬまで氣違ひにしておこうとさえ望んでおりますというわけです。大司教は、幾度も受け取つた条理をつくした慎重な嘆願書に心をうごかされて、お附きの司祭の一人を呼んで、あの学士の申し状が事実かどうか、瘋癲病院の院長から事情をききとってくるように、それと同時に、本人の狂人にも會つて話をして、もし正氣だと思われたら、退院させて自由の身にしてやるがよいとお命じなすつたんです。司祭は言われたとおりに実行しました。すると院長が言うのには、あの男はまだまだ氣が違つてゐる、ちよくちよくいかにまだ立派な判断力をそなえた人のようなことを言うが、しまいにはとんでもないわごとを言ひ出します、それが口数にしる言つてゐる中身にしる、はじめのうちのそつのない話しぶりと

んとんだということは、当人に會つて話してみてもわかりになるとおりですというんです。司祭も実地にあたつてみようと思つて、氣違ひを連れて来てもらつて、一時間も、いやそれより長い間、話してみたのですが、その間ずうっと氣違ひはただの一度も、間違つたことも、でたらめなことも言わないんです。それどころか、てんでおだやかな話しぶりなので、司祭もこれは正氣に返つてゐるなと思われないわけにはゆかなかつたのです。氣違ひが言つたらしいんな話のなかで、こんな話がありました。院長は自分に對して惡意をいだいてゐる、それというの、《この男はときどき正氣に返ることはあるが、まだまだ本物じゃない》と院長から言つてもらうお札に、親類の連中から受け取つてゐた贈り物をふいにしたくないからだというわけですが、それに、この男のこうむつてゐる不幸のなかで、一番の障害は彼のもつてゐる大きな財産で、その証拠には財産を勝手にしたいばかりに敵どもは、われらの主が彼を畜生道から人間にたち返らせてくだすつたお慈悲に、わざと眼をつぶつて信用しようとしなないのだというわけでした。早い話が、彼の話し方によつて、院長は怪しい、親類の連中は強欲で冷酷だ、しかも自分はちゃんと分別をそなえてゐると相手に信じこませたので、司祭はこの男をつれて帰つて、大司教に會つてもらつて、この件の真相を親しく調べていただくとしようときめたんです。こう固く心にきめて、正直者の司祭は院長にむかつて、

この学士がこの病院へ初めてやつて来たときのこの学士がこの病院へ初めてやつて来たときの着物をかえしてやるように言いつけてくれと頼みました。しかし、院長はくり返し、学士がまだ亂心していることは疑問の余地がないのだから、なされることにはくれぐれも氣をつけるようにと注意をうながしたものです。しかし、院長のこういう注意も警告も、司祭がこの狂人を連れ帰るのを断念させるのにはいささかの役もはたしませんでした。それが大司教の命令だとわかつたので、院長は言われるままに従つて、学士に着物を着せるように言いつけたのですが、それはまだおろしたてのきちんとしたものでした。いよいよ正氣の衣服をまとして、狂氣の衣服を脱ぎすつてと、学士は司祭にむかつて、どうかお慈悲と思つて、これまでの同輩の狂人たちにはさよならを言ひに行かせてもらいたいとのみしました。すると司祭も、あなたのお供をして、この病院にゐる患者たちに会いたいと言ひます。そこで、二人は階段をのぼつたのですが、そこに居合わせた何人かの人々もこれに従つたのです。さて、学士が一人の狂暴性の狂人のいる、といつてもそのときは落ちついて静かにしていたのですが、その檻のところへ近づいて、

こう言葉をかけたんです。

《おい兄弟よ、おれに何か頼みはないか、おれはいよいよ家へ帰るんだからさ。ありがたいことに神さまは、広大無辺の大慈大悲によつて、とるに足らぬおれに、ふたたび正氣を呼びもどしてくだすつたんだ。今ではおれもすこやかで、

正気に返った。まったく神のご威力にとつて不可能なことは何一つないよ。なにしろおれを昔の状態にしてくださいすったんだから、神のみに大いに希望と信頼をささげるんだよ、きみだって神を信じさえしたら、元どおりにしてくださいさ。おれは、つとめてきみに食べものを送るつもりだから、なんとしても食べることだ。ところで、きみに知っていてもいいことは、すべてわれわれの狂気は、胃袋がからっぽで、脳も空気だらけということに由来するんだと、おれは体験者として、そう思っているってことだ。元氣を出すんだ！ え、元氣を！ 逆境にあつて氣落ちすると、健康を害し、死をもたらしというからね！

この学士の言葉を初めから終りまで、狂暴性の狂人の檻のちょうど正面にあたる檻の中にいた、別の狂人が聞いていたのですが、それまでももひき一枚のはだかだねころんでいた古ごさの上から起きあがつて、丈夫に正氣になつて出て行くというやつは誰だと、大声でたずねたもんです。

「おれだ、兄弟、ここを出て行くというのは。もうおれにはここに在る必要はないんだ。そこで、こういう広大な恩恵を与えてくださった天の神々に、おれは限りない感謝をささげるんだ」

「言葉に氣をつけるんだ、学士さん、悪魔にだまされぬようにしろ」と、その狂人が言い返しました。《足を休息させて、自分の家にじっと

しているがいい、そうすりゃ、また舞いもどつてくる面倒がはぶけようぜ》

《おれがなっていること、自分で知っているんだ》と、学士が答えました。《もう二度と宿場から宿場と旅をする必要はないんだ》

《なに、おぬしが正氣だ？》と、狂人が言いまして。《よかろう。今にわかるさ。氣をつけて行くがいい。しかしな、わがはいはユピテルに誓つて、その神威を地上で代行するからだが、おぬしをこの病院から出し、おぬしを正氣だと信ずるという、セビーリヤが今日犯した、ただこの一つの罪によつて、わがはいは何千何万年と忘れられることのない刑罰を、この市にくださねばならぬのだ、よいかな。あわれなへなちよこ士め、きさまはわがはいにそれをおこなうだけの力があるのを知らんのだな？ されば、今も申したごとく、わがはいは、鳴神ユピテルなるぞ、すべてを焼きつくす雷電を駆使し、つねづね世界を震駭し、破壊することができのうだ。しかし、ただ一事によつて、この無知なる都市に罰を加えてやろう。ほかでもない、わがはいの呪いがかけられた今日だいまより、向かうところ満三千年のあいだ、セビーリヤはもとよりのこと、その周辺一帯の地に、雨を降らすぬということだ。おぬしが自由で、おぬしが元氣で、おぬしが正氣だというのに、わがはいが氣違いで、わがはいが病氣で、わがはいがしましめられているとはなにごだ！ 雨を降らすくらいなら、いっそ首をくくつて死んでやる

わ！

その場に居合わせた連中はひとしく、この氣違いのわめき声と言ひ草に耳をそば立てていましたが、しかし、われわれの学士は、われらの司祭のほうをふり返つて、相手の両手をつかんで、こう言つたもんです。

《心配なさることはありませんよ、司祭。それにこの狂人の言葉なぞ氣になさることはないんです。というのは、こいつがユピテルで、雨を降らしたくないとしたら、わたしはネプトゥヌス、つまり水の父で、水の神なんですから、いつでも好きなときに、必要なときに、雨を降らせてみせますよ》

これに対して、司祭が答えたのです。

《それはそうですがね、ネプトゥヌスさん、ユピテルさんを怒らせてはいけませんよ。あなた、ご自分の家にこのまゐらっしゃい。いづれそのうち、もっと工合のいい、もっと暇のあるときに、お迎えにまいりましょう》

院長をはじめ、その場に居合わせた人々がふきだしましたが、その笑い声を聞くと、司祭はいくらか赤面したものです。みんな、学士の衣服をぬがせ、元の檻の中へおさまり、このお話しもおしまいです」

「なるほど、床屋どん、この場合にびつたりだから、どうしても話さないではいられなかったとおっしゃるのは、この話だったのかね？ これはしたり、ひげ剃りどんよ、ひげ剃りやどん！ 節の綱目からすかしても見えんという男

は、よつぽどの言ことというものじゃ！　そもそも人の才能と才能、勇氣と勇氣、美貌と美貌、血統と血統を、あれこれとくらべるということが、いつでもいまいましいもので、誰にもいやがられるものだからいのが、あなたにわからないとはどうしたことだろうな？　床屋どん、わしは水の神、ネプトゥヌスでもなければ、まして利口な男でもないのに、利口者と思われようとつとめる者でもない。ただ遍歴の騎士道の掟が厳然とおこなわれていた、まことによき時代を再現しようともせぬ、今の世がおちいつている迷妄を、世の中に覺らせようと心胆をくだいておとめでござす。しかしながら、国の守りもおとめたちの庇護も、孤兒や幼な子らの援助も、思いあがつた者どものこらしめも、謙虚な人々への報いも、すべて遍歴の騎士たちが引きうけ双肩にこれを担った良き時代がほしいままに、至福は、とうていわれらの汚濁にみちた時代のうけることのできぬものじゃ。今の世に見られる騎士の大多数は、身に鎧よろいや鎖帷子さざりよりも、装っている金襴、緞子、その他豪華な織物の衣ずれの音をひびかせている。頭から足の爪先まで鎧よろいに身をかためて、きびしい風雪をものともせず、山野に眠る騎士は跡をたつたし、鎧よろいから足を離さず、槍にもたれて、遍歴の騎士がおこなったように、いわゆる眠気を克服することのみつとめた者もない。この森を出て、あの山に入り、山から多くの場合嵐をふくんで波立ちさわぐ海の、おびしい人気ない浜辺を踏んで、

海の岸辺に、櫓かきも帆も、帆柱も、船具さえもない小さい小舟を見つ、心に何の恐れもいだかずにその小舟に跳び乗って、底知れぬ海の荒れ狂う波に身をまかせると、波はたちまち空高く持ちあげるかと思えば、みるみるうちに深淵の底へ引き込んだが、しかもこの猛威をふるう嵐にまともに立ち向かって、いつしか自分でも気づかぬうちに、身は舟に乗った浜辺から三千里グワのうへ離れたところにある、そこでこの遠いはるかな未知の国に下り立って、羊皮紙と言わず、ブロンズに彫りつけて残すべき数々の出来事をけみすると申すごとき偉丈夫も今日では跡をたつたのじゃ。これに反して今日では、勤勉が怠惰に変わり、徳義が悪徳にゆずり、勇氣が傲慢に変わり、黄金の時代、遍歴の騎士にのみ栄え光彩を放った武芸の実践に代って、口先の理論が時を得顔じゃ。そうでないと申されるなら、おたずねしよう。あの高名なアマデウス・デ・ガウラより、謙讓で、勇壮なものがござるか？　パルメリン・デ・イングラテルラより思慮ぶかい者がござるか？　ティランテ・エル・ブランコより度量ひろく、くみしやすい者がござるか？　リスアルテ・デ・グレンシアより伊達な者がござるか？　ドン・ベリアニスより手傷を負い、負わせたものがどこにござるか？　ペリオン・デ・ガウラより大胆な者が、フェリスマルテ・デ・イルカより危険を物ともせぬ者が、エスブランドイアンよりひたむきな者がどこにござるか？　ドン・シロンヒリオ・

デ・トラシアより胆太い者がござるか？　ロダモンテより氣性のほげしい者がござるか？　ソブリーノ王にまさる慎重な者がござるか？　レインアルドスにまさる無謀な者がござるか？　ロルダンにまさる不敗の勇士がござるか？　いやさ、トゥルバン僧正の『宇宙誌』によると、現在のフェラーラ公爵家の始祖、ルジェーロにまさる、勇ましく、礼儀正しい者がござるか？　これらすべての騎士も、その他名を挙げてもよいもののふはじゃ、住職殿、いずれもそれ、騎士道の光とも、誉れとも言うべき遍歴の騎士だったのでござす。これらの人々、もしくは、かような人々こそ、拙者の献策の人々であつてほしいと申すのじゃ。もしそうだったあかつきは、陛下のお役にも大いに貢献し、莫大な費用も節することができようし、一方、トルコのやつめは、ひげをむしつてくやしがることになろう。それにしても、拙者はわが家にとどまるつもりじゃ、と申すのも、例の小話の司祭が連れ出しにまいらぬのでな。しかしながら、もしユピテルが、床屋どんの言いおつたとおり、雨を降らせるとしたら、拙者がここにおるからには、いつなりと氣のむくときに、雨を降らすことにしましうて、と、拙者が申すのも、金だらけ氏に、そなたの話がよろくわかったと知つても、いらいたからですわい」

「いや、まったくのところ、ドン・キホーテさま」と、床屋が言った。「わっしや、そんなつもりでお話したわけじゃありませんよ。神さ

まあお力そえくさい。わっしやなんでもないつもりでお話したんですから、そうお腹立ちなさらんでくださいよ」

「腹を立ててよいか悪いかは、わしがよく存じておる」と、ドン・キホーテが答えた。

このとき住職が口を開いた。

「ただいままでわしはほとんどひとことも申しませんでしたが、しかし今ここで、ドン・キホーテ殿の申されたことから、かきたてられるような良心のうずきをかかえて、このまま黙って引ッ込んでもらえないようですわい」

「それどころか、もっと他のことでも住職殿、ご遠慮には及びませんよ」と、ドン・キホーテが答えた。「だから、その良心のうずきをおっしゃってください。そういう良心のうずきを抱えておるのは、あまりたのしいもんじゃありませんからな」

「そんなら、お許しが出たから申しますが」と、住職が始める。「わしの気がかりはつまり、ドン・キホーテ殿の、貴殿がおあげになったあまたの遍歴の騎士のこととくが、真実間違いない骨肉をそなえて生きておったとは、どうしてもわしには合点がゆかぬということじゃ。それどころか、どれもこれもいっさいが、つくりごとで、たわごとで、嘘っぱちで、眼をあけている人間ども、いや、と申すより半分眠っている人間どもの夢物語だと思えますわい」

「それがまた、多くの者がおちいっておる迷妄で」と、ドン・キホーテが応じた。「つまりあ

あいう騎士方が、かつてこの世にあつたということを信じないのじゃ。そこで、拙者は幾度となく、いろんな人々に、いろんな機会に、このほとんど共通した迷妄を、真理の光の中へ引きだそうとつとめました。しかし、あるときはわしの思いがとげられなかったこともありましたが、またあるときには、真実の肩の上にささえてもらって、思いどおりになりましたわい。その真実と申すのがまことに確かなので、わしはこの眼でまざまざとアマデイス・デ・ガウラを見たと申してもかまわぬくらいで、あの人は背の高い、顔は色白で、黒いがいかに立派なひげをつけ、やさしいがどこことなくきびしい眼差の、無口で、めったに怒らない、怒ってもすぐにさうりとする男でこわしたよ。このアマデイスの風手を描いたやり方で、わしは世の物語に現われる、ありとあらゆる遍歴の騎士の姿を描くこともできそうに思われます。それと申すのも、彼らの実録の述べているとおり彼らがどんな人柄であつたかと、わしのいだいてる認識にもつき、また彼らがうちたてた功名手柄や、彼らの人となりにもとづいて、彼らの風手も、顔色も、からだつきも、きわめて的確に推量することができからですて」

「そんなら、ドン・キホーテさま、どのくらい大きかったとお思いですか、あの巨人モルガンを？」と、床屋がたずねた。

「巨人らについては」と、ドン・キホーテが応じた。「そもそも彼らがこの世に實際いたもの

かいなかったものか、いろいろ意見もあることだが、しかし、微塵も真実にもとるはずのない聖書が、あの途方もなく大きなベリシテ人ゴリアテの物語を述べて、ちゃんと巨人らの存在したことを教えている。なんでも身の丈七コード半もあつたのだから、これはすばぬけた大ききじゃな。さらに、シチリア島で、とてつもなく大きな脛骨と、肩胛骨が発見されたが、その大ききからも、持ち主は巨人で、しかも塔のごとく大きなやつだったということは明らかじゃ。というのも幾何学がこの事実を疑いないものとしてからです。しかし、それにもかかわらず、モルガンテがどれだけの大ききだったかは拙者も確答いたしかねる。ただし、そうそう高い背丈ではなかったらうと思えますがな。わしがこいう見解をいだくにいたつたのは、物語の中であの巨人の働きを詳細に述べている個所で、しばしば彼が屋根の下で眠つたということを見つけたからです。というのだからだを入れる家があつたとすれば、あの男の大ききがそれほど法外なものでなかったことは明らかですからな」

「なるほどな」と、住職が言った。

住職はこいうとんでもないわごとを聞いてうれしくなつて、レイナルドス・デ・モンタルバン、ドン・ロルダン、そのほかフランスの十二貴族の顔つきについて、どうお思いなさるとたずねた。というのも、十二貴族はいずれも遍歴の騎士だったからである。